

平成17年度（第49回）
岩手県教育研究発表会発表資料

高等学校の学習指導の改善に関する研究

- 指導に生かす評価の工夫をとおして -

研究協力校

岩手県立花北青雲高等学校
岩手県立花巻南高等学校

研究協力員

岩手県立水沢高等学校	教諭	石川克紀
岩手県立宮古高等学校	教諭	柿崎朗
岩手県立盛岡北高等学校	教諭	高橋良一
岩手県立黒沢尻北高等学校	教諭	上柿剛

平成18年1月12～13日
岩手県立総合教育センター
教科領域教育室
夏井敬雄 佐藤政則
蛇口等 遠藤毅

《 目 次 》

研究目的	1
研究の方向性	1
研究の計画	1
本年度の研究の内容と方法	1
1 研究の内容と方法	1
2 研究協力校	2
研究結果の分析と考察	2
1 指導に生かす評価に関する実態調査	2
2 高等学校の学習指導に関する推進構想	3
3 指導に生かす評価に関する推進試案	3
4 評価の工夫による指導改善の方向性	5
5 国語科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察	5
6 数学科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察	9
7 地歴・公民科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察	12
8 外国語科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察	17
9 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ	20
高等学校の学習指導改善の研究のまとめ	20
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20

おわりに

【参考文献】

【参考 Web ページ】

【補充資料】

研究目的

教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」(平成12年)では、高等学校においては目標に準拠した評価を一層進めることを求めている。また、「高等学校生徒指導要録の改善等について(通知)」(平成13年)は、各教科・科目の評定については、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点を踏まえて評価を行うことの重要性を示している。このことを踏まえて、生徒の学習の過程や成果を適切にとらえ、意欲を高めて学ぶ喜びを得ることができるよう、指導の改善を行う必要があると考える。そしてこのことは、変化が激しい現代社会で欠かすことのできない「生きる力」の育成に結び付いていくものである。

高等学校においてはこれまでも絶対評価が行われてきたものの、教科・科目において育成しなければならない資質や能力のとらえ方が曖昧であるなど、いわゆる目標に準拠した評価が適切に行われていない実態がある。また、評価結果が十分に指導改善に結び付いているとは言い難い。

このような状況を改善するためには、高等学校において育成すべき資質や能力を明らかにし、それが身に付いているかどうかを適切にとらえる評価を工夫し、その評価結果を指導に生かすことが必要である。

そこで、この研究は指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の改善に役立てようとするものである。

研究の方向性

高等学校の学習指導において「生きる力」の育成、つまりは生徒の学力向上を図るために、指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めるための具体的な指導方法を提案することとする。

研究の計画

この研究は、平成15年から平成17年にわたる3年次研究である。

第1年次(平成15年度)

外国語科における基本的な考え方の検討、基本構想の立案、実態調査の実施、学習指導の試案の作成

第2年次(平成16年度)

外国語科 - 学習指導の試案に基づく指導と評価の計画の作成、授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

国語、地歴・公民、数学科 - 基本的な考え方の検討、実態調査、推進構想の立案、推進試案の作成、各教科の指導と評価の計画の作成

第3年次(平成17年度)

指導と評価の計画に基づく授業実践、授業実践の分析と考察、研究のまとめ

本年度の研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

(1) 指導と評価の計画に基づいた授業実践計画の作成(文献法)

單元ごとに1単位時間の評価規準を盛り込んだ「年間指導計画」を基に、各教科の特性に留意した評価シートを作成し、指導と評価の計画に基づいた授業実践の計画を作成する。

(2) 授業実践及び実践結果の分析と考察(授業実践・質問紙法)

指導と評価を位置付けた授業実践を行い、その結果について、授業担当者への意識調査等を基に、分析・考察を行う。

(3) 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ

授業実践結果の分析と考察を基に、その成果と課題をまとめ、高等学校における、指導に生

かす評価方法の工夫を図った指導と評価の計画の妥当性について明らかにする。

2 研究協力校

岩手県立花北青雲高等学校 岩手県立花巻南高等学校

研究結果の分析と考察

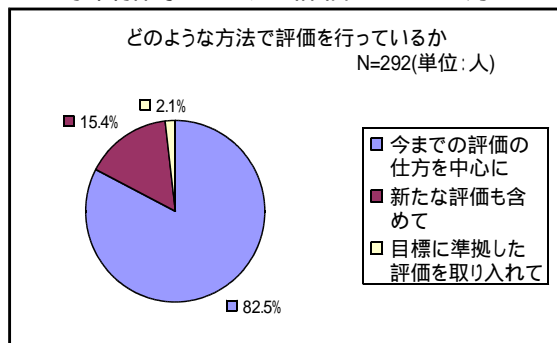
1 指導に生かす評価に関する実態調査

(1) 実態調査の概要

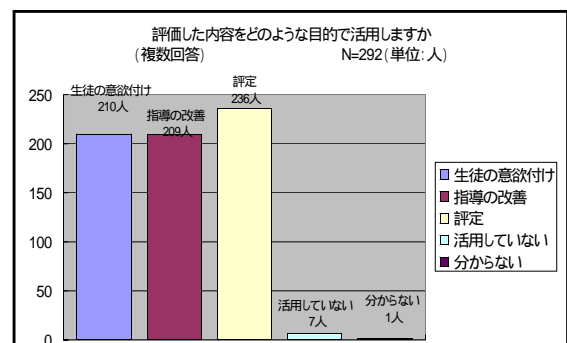
この調査は、評価に関する意識や取り組みの実態を把握し、評価の工夫による指導改善をする上での課題を明らかにすることを目的に実施したものである。調査期間は平成16年7月6日～8月27日、調査対象者は基本研修講座のために来所した高等学校教員292名である。

(2) 実態調査の結果

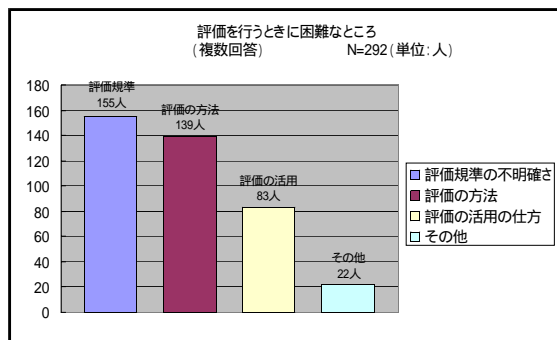
ア 学習指導における評価のとらえ方



【図1】 評価方法



【図2】 評価の生かし方



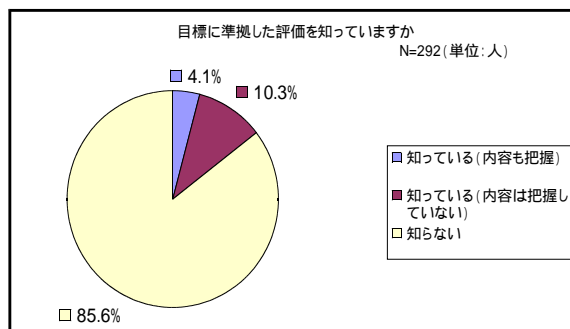
【図3】 評価の難しさ

【図1】～【図3】は、学習指導における評価のとらえ方に関する調査の結果である。

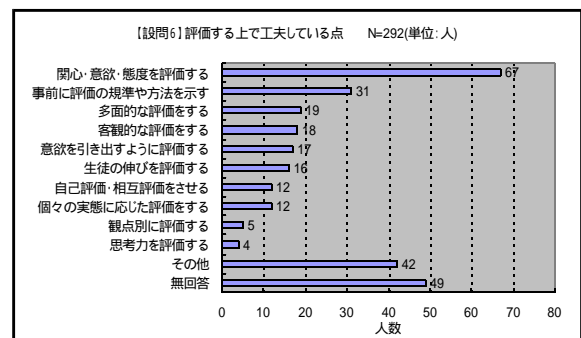
【図1】の「今までの評価」とは、定期考査、小テスト、提出物等によって生徒が獲得した得点を評価する方法であり、「新たな評価」とは、生徒の関心・意欲・態度等の観点を意識した方法である。回答結果から、今までの評価方法を継続している割合が大きいことがわかる。【図2】

を見ると、提示した三項目とも7割前後の回答があることから、評価を意識した指導が行われていることがわかる。【図3】を見ると、半数以上が「評価規準の不明確さ」を困難点として回答しており、「評価の方法」についても半数近くが難しいと感じていることがわかる。

イ 目標に準拠した評価と評価の工夫



【図4】 「目標に準拠した評価」の認知度



【図5】 評価の工夫

前頁【図4】は、「目標に準拠した評価」という用語を知っているかどうかについての回答結果である。知っていると回答した教員による具体的な記述をみると、その内容までは把握していない割合が10.3%であった。従って、全回答者の95.9%（280人）が目標に準拠した評価を把握していないことが分かる。また、評価する上で工夫している点について記述したものを分類したものが前頁【図5】である。無回答も多かったが、記述があった回答者に関しては、「その他」も含め、いろいろな角度から生徒を評価しようと工夫していることが分かる。

2 高等学校の学習指導に関する推進構想

(1) 評価に関する教員の実態及び生徒の現状

高等学校の授業では、単元の、あるいは1単位時間の明確な学習目標が教師から生徒に示されないまま学習指導が行われている実態が多く見られる。また、評価を指導改善に生かすという視点に欠け、生徒が授業でどのような能力を身に付けたのかという成果が学習指導の目標に即して確認されていない傾向がある。そのため、生徒は学習の目標があいまいなままに授業を受け、自己の能力がどのように授業をとおして培われているかが把握できていない場合が多い。

(2) 目標に準拠した評価の導入と実施

生徒一人一人の進歩の状況や目標の実現状況を的確に把握し、基礎・基本の確実な習得を図るためには、これまでどおりの評価では不十分である。そこで、授業内容を詳細に見直し、生徒がどれだけ指導内容を理解しているかを学習指導要領解説に示してある四観点に即して見ていくために、目標に準拠した評価を行うことが必要である。

そのためには、学習の目標を明確にし、年間指導計画に配置していかななくてはならない。学習指導要領に基づいて国立教育政策研究所が示した評価規準を土台としながら、最終的に単元及び1単位時間ごとの指導目標及び評価規準を各学校で作成しなくてはならない。

その際に、作成した評価規準が授業で実際に活用できるように、目標に準拠した評価を充実させていくことが肝要である。そのための案として、次に述べる三段階のステップを踏んで、着実に目標に準拠した評価の導入の仕方を提示する。

3 指導に生かす評価に関する推進試案

(1) 年間指導計画（学校全体での推進）

「年間指導計画」は、指導する教科ごとにまとめたものである。教科としての目標及び評価規準を記載し、教科としてどのような立場で指導するのか生徒や外部（保護者、地域等）に示す。

(2) 年間指導計画（各教科での推進）

(1)の「年間指導計画」をうけて、各教科の中の科目ごとに指導計画を記していく。科目の目標及び評価規準を示し、指導する内容のまとめ（単元）での目標及びおおまかな内容と評価規準を記述し、各教科の指導内容等を知らせる役割をもつ。

(3) 年間指導計画（各科目での推進）

(1)(2)をうけて、各科目の内容のまとめ（単元）ごとに年間指導計画を作成する。ここでは、内容のまとめごとに指導内容や配当時間、小単元または1単位時間での評価規準を明示して生徒、保護者等外部へ指導内容を公表していくよう作成する。ただし、(3)については、年度当初に一斉に作成することを目標とはせず、実際に指導する期間よりも前に作成を終えるといった柔軟な対応とする。そのことにより、今までの授業準備と並行して修正がしやすいよう配慮する。この計画を一年間進めて、年度末にはすべて指導した内容が揃い説明できるようにする。

以上、(1)～(3)の要領で進めていく推進試案をまとめたものが次頁【図6】である。

1 各教科の指導目標及び評価規準を盛り込んだ年間指導計画

年度岩手県立 高等学校 年間指導計画

教科	目 標			
評価規準				
関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
各学年での指導科目と目標				
< 1 学年 >				
科目	単位数	目 標	備 考	
< 2 学年 >				
(中 略)				
< 3 学年 >				

作成のための留意点

- ・教科としての目標、評価規準を明確に示した上で、指導する科目ごとに目標や単位数、指導するクラス等を示す。
- ・学年ごとにまとめて、一つの教科での指導計画を大まかに示したものにします。
- ・各教科でまとめたものを綴り、学校としての年間指導計画と位置付ける。

2 各科目ごとの目標及び評価規準と内容のまとめりごとの評価規準を盛り込んだ年間指導計画

年度岩手県立 高等学校 年間指導計画 (教科)

科 目	目 標			
使用教科書		使用副教材		
評価規準				
関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
内容のまとめりごとの内容と評価規準				
内容のまとめり (単元名)				
内容				
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
指導予定時間				
内容のまとめり (単元名)				

作成のための留意点

- ・一つの教科の各科目の目標、評価規準及び科目内の内容のまとめりを示していく。
- ・内容のまとめりごとの評価規準を示していく。
- ・科目ごとにまとめたものを教科でまとめて綴り、教科としての年間指導計画として位置付ける。

3 単元ごとに1単位時間の評価規準を盛り込んだ年間指導計画

年度岩手県立 高等学校 年間指導計画 (科目)

指導学年	単位数	内容のまとめり (単元名)			
単元	配当時間	1 単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解

作成のための留意点

- ・科目内の単元ごとに評価規準を示していく。
- ・単元ごとに授業時間数と1単位時間ごとの評価規準を観点別に示し、授業の流れが分かるように記載する。
- ・単元ごとにまとめたものを科目でまとめて綴り、科目としての年間指導計画として位置付ける。

【図6】指導に生かす評価を取り入れるための推進試案

4 評価の工夫による指導改善の方向性

生徒個々の実態を的確に把握して、それに基づく適切な指導・助言を行い、生徒自身につまずきを発見させ、課題解決をさせるためには、目標に準拠した評価を推進していく必要がある。

しかし、高等学校においては、目標に準拠した評価の考え方がほとんど浸透していない状況があり、たとえ評価規準を盛り込んだ年間指導計画を作成しても、それだけでは指導改善に結びつかない可能性が大きい。そこで、内容のまとまり（単元）ごとに1単位時間の評価規準を盛り込んだ年間指導計画、つまり、「年間指導計画」を具体的に授業に反映させるための方法として、各教科の特性に留意した評価シートを作成し、活用することとした。この評価シートの作成と活用によって、目標に準拠した評価の考え方が学習指導に導入されることになるものと考えられる。評価の考え方に変化が生じれば、授業の進め方、生徒への指導の仕方に変化がもたらされ、特に、「知識・理解」に偏りがちであったこれまでの学習指導が継続的に見直されていくことになるだろう。

この研究は目標に準拠した評価を導入、定着させ、結果として指導改善が行われ、生徒の学力向上が図られることを目的とするものである。現段階では、各学校で個々の教師が確立してきた評価の方法や考え方を尊重しながら、各校が生徒の実態に即して緩やかに新しい評価方法を取り入れていくことが最善の方法だと考える。

そこで、年間指導計画～に基づいた、各教科の特性に応じた評価シートの作成とその活用が指導改善につながることを、各教科の授業実践をとおして明らかにしていく。

5 国語科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察

(1) 国語科における評価の工夫による指導改善の計画

ア 改善の視点

岩手県教育委員会事務局が発行した「教科指導法改善実践事例集 第12集・国語」では、指導改善の方向として、第一に学習者が主体的に活動できる授業をするために指導内容の精選・厳選が重要であること、第二にペーパーテストの結果のみの評価を改め、生徒のもつ能力を多方面から見いだして評価することが大切であると指摘している。

しかし、指導内容の精選が、国語科の目標である「国語の能力の育成」の観点からなされているとは言い難い現状が見受けられる。多くの学校において、科目毎の年間指導計画に基づいての教材研究が十分に行われていないからであると考えられる。教材研究は、主に教材の価値を明らかにする視点でなされがちであり、その結果、その単元で生徒のどのような資質や能力を育成するかを前提とした教材研究が行われていない実情が多く見られる。

指導改善のためには、年間指導計画と緊密に連動させた教材研究が行われることが不可欠である。その際、【表1】に示したように、例えば、「読む能力」には、それぞれ、言語による「思考・判断」や「技能・表現」が内包されていることを踏まえ、「読む」という活動だけにとらわれず、「読む」活動を支えている思考力や表現力を育成することが大切である。同様に、「話す・聞く能力」や「書く能力」についても、それぞれの言語活動を支える思考力や表現力の育成を図るように教材研究を行うことが肝要である。

【表1】国語の五観点

1	関心・意欲・態度
2	話す・聞く能力 思考・判断 (「話す」順序や内容を考える) (「聞く」内容の大事な点を考える) 技能・表現(言語の使用・事柄の表現)
3	書く能力 思考・判断 (「書く」順序や内容を考える) 技能・表現 (言語の使用・事柄の表現)
4	読む能力 思考・判断 (「読む」内容を考え、理解する) 技能・表現 (言語の使用・事柄の表現)
5	知識・理解

イ 年間指導計画 の作成

各科目ごとの目標及び評価規準、学習指導要領の内容と内容のまとまりごとの評価規準を一覧にしたものが年間指導計画 である。【図7】は、「C読むこと」における「学習指導要領の内容」と「内容のまとまりごとの評価規準」の一部を抜粋したものである。これは国立教育政策研究所が作成した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」を参考にしながら、各学校の実態に合わせて作成していくことが望ましい。

	学習指導要領の内容 (指導事項)	評価規準		
		関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
C 読むこと	ア 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。 イ 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること。 ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。	・様々な文章について、叙述に即して内容を的確に読み取ったり、表現に即して読み味わったりして、もの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしようとしている。	・文章の内容を叙述に即して的確に読み取っている。 ・必要に応じて文章の内容を要約している。 ・文章を読んで、構成を確かめている。	・文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かに身につけている。 ・常用漢字の読みを理解している。 ・文語のきまり、訓読のきまりなどについて理解している。

【図7】「年間指導計画」(「C読むこと」)の一部

「学習指導要領の内容(指導事項)」に基づいて、授業で取り扱う教材によって生徒のどのような国語の力を育てるかを具体的に考えながら作成していくのが年間指導計画 である。【図8】は「国語総合」の年間指導計画 の作成例の一部である。「学習指導要領の内容」の欄には【図7】の「学習指導要領の内容ア～ウ」の中から「ウ」を選び、「C - 読むウ」と記入している。「R(読む能力)」の欄の評価規準は、【図7】の「評価規準」に基づいて記入する。同じように、「読む能力」を重点的に育成することを想定しながら、「I(関心・意欲・態度)」と「K(知識・理解)」の欄に【図7】の「評価規準」に基づいて記入する。こうして記入したのが「内容のまとまりごと評価規準」である。それに基づいて、「単元目標」を設定する。その際に、単元で取り扱う教材に即し、生徒の言語活動を想定して設定する。最後に「単元目標の評価規準」を「単元目標」と連動させながら設定する。ここでは「R(読むこと)」の観点を重点化し、読むことにおける「I」と「K」を設定している。

年間指導計画 【国語総合】						
月	単元名	学習指導要領の内容 (指導事項)	単元目標 ()内は観点	教材 ()内は時間数	内容のまとまりごとの評価規準 単元目標の評価規準	評価方法
4 月 中 旬 時 間	古文入門	【C読む・ウ】 ・文章に描かれた人物情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。	ア人物の心情を想像力を働かせながら読もうとする態度を身に付ける。(I) イ人物の心情をとらえながら古典の文章を読み味わう。(R) ウ古典の表現の特色について理解する。(K)	1 検非違使忠明、いさかひのこと(2)	I 古典の文章を、表現に即して読み味わうことを通して、もの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしようとしている。人物の心情や場面を想像力を働かせながら読もうとしている。	観察シート
				2 鳥羽僧正、絵をもつて諷すること(1)	R 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わっている。 文章に描かれた人物の生き方、もの見方や考え方、人物相互の関係をとらえている。	ノート 発言 テスト
				3 源頼義、馬盗人を射殺したること(3)	K 文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かに身につけている。 文語体の表現や文体の特色について理解している。	ノート 発言

(注) I = 関心・意欲・態度、S = 話す・聞く能力、W = 書く能力、R = 読む能力、K = 知識・理解

【図8】「年間指導計画 (国語総合)の作成例」の一部

ウ 学習のねらい確認シートの作成

学習目標の実現状況を生徒に記録させることによって、学習のねらいを生徒に明確に示すとともに、生徒の理解の実態を把握しながら、指導を改善していく方向を目指すこととする。そのためには年間指導計画 ~ に基づいて年間指導計画 を作成し、この年間指導計画 に対応させながら、【図9】のような、単元ごとの学習目標の実現状況を生徒が記録する「学習のねらい確認シート」を作成して授業で活用する。内容は次のとおりである。

- ・単元の目標、取り扱う教材名、学習予定期間等の記述
- ・単元の目標とそれを実現するための学習のねらいの記述
- ・学習の前半、後半における学習のねらいの実現状況を記入する欄
- ・不十分な実現状況の理由を記述する欄
- ・学習に対する関心や意欲を回答する欄

「単元の目標ア～ウ」は年間指導計画 の「単元の目標」を記入する。さらに、この単元の目標を実現するために「単元の目標ア・イ・ウ」それぞれに「学習のねらい1～5」を記入する。これは単元の目標を実現するための具体的な学習の手順となるように、指導要領の「言語事項」や「言語活動例」を十分に踏まえ、授業中の生徒の学習活動を想定して設定する。学習のねらいの実現状況を判断しやすくしようとして、回数等の量的なねらいの設定は避けるようにする。この確認シートにおける判断のレベルは生徒個々に委ね、個々の成長を促したい。どうしてもレベルの提示が必要な場合は教師が状況に応じて行えばよい。このシートでは 学習の目標と学習の手順、 生徒自身による「学習のねらい」の実現状況、 学習上のつまずき、の三点が確認できる。このことによって、生徒個々に対する指導や単元終了前における指導改善が期待できる。

学習のねらい確認シート		No. 1	
年 組 番 氏名		記載日 前半 (/) 後半 (/)	
学習単元 ・ 説話 (国語総合古典編)		学習予定期間 月 日 ~ 月 日	
教材名 (時数) ・『検非違使忠明、いさかひのこと』 (2) ・『烏羽僧正、絵をもって諷すること』 (1) ・『源頼義、馬盗人を射殺したること』 (3)		単元の目標 ア 人物の心情を想像力を働かせながら読む イ 人物の心情をとらえながら文章を読み味わう ウ 古典の表現の特色について理解する	
単元の目標と学習のねらい		前半	後半
ねらい1～5の実現状況を . . . で自己評価すること		を付けた理由を書きなさい	
ア 人物の心情を想像力を働かせながら読む		例：1 - <前半> 「系」の書き方がわからない	
1	文章の構成や展開を踏まえて読むことができる		
2	文末の表現を吟味し、正確な読みができる		
3	古語の意味を理解して読むことができる		

【図9】「単元のねらい確認シート」の一部

(2) 国語科の授業実践

ア 実践の概要

県立花北青雲高等学校の2学年と県立水沢高等学校の2学年とで授業実践を行った。それぞれ、年間指導計画を作成し、それに基づいて「学習のねらい確認シート」(以下、「確認シート」とする)を作成し、授業で活用した。「古文入門」(配当時間6時間)の単元の学習に入る前に確認シートを生徒に配布し、2時間目と最終時間に確認シートに記入させた。1回目の記入後に、(使用したシートではC)の自己評価に対しては、記述内容に基づいて個別の指導に生かすこととした。確認シートはそれぞれの学校の実態に応じて作成したが、学習のねらいと学習の進め方を確認することが目的であるから、確認シートに記載する評価規準の文言にはあまりとらわれなくてよいこととした。

【表2】「学習のねらい確認シート」の集計結果(一部)

学習目標												
1 古文を正しく音読できる												
2 古文独特の語句、言い回しが理解できる												
3 対句的な表現に注目し、その表現効果を理解できる												
4 段落毎の要旨をとらえることができる												
学習目標	1回目		2回目		1回目		2回目		1回目		2回目	
	A	%	A	%	B	%	B	%	C	%	C	%
1	5	12.5	14	36.8	31	77.5	23	60.5	4	10	1	2.6
2	1	2.5	4	10.5	31	77.5	31	81.6	8	20	3	7.9
3	3	7.5	10	26.3	29	72.5	27	71.1	8	20	1	2.6
4	4	10.0	9	23.7	31	77.5	28	73.7	5	12.5	1	2.6
C印を付けた理由												
学習目標	1回目					2回目						
1	練習不足(3)					音読回数が足りない						
2	現代語と勘違いする					休んだところが分からない						
3	どこが対句か分からない(5)					まだ理解しきれていない						
4	内容がつかめない											

イ 実践結果の分析と考察

活用したシートを集計した一部を【表2】に示した。学習目標に対する実現状況を生徒自身がどのようにとらえているかを比較して把握できるように、授業実践者が工夫して作成したものである。

【表3】の授業実践後の授業担当者2名に対するアンケート結果によると、2名とも「確認シート」は学習指導の改善に効果があったと回答し、その理由を【表2】のように生徒のつまづきを単元の指導の過程で把握し、個別の指導に反映するすることができたからであるとしている。

また、「確認シート」を活用したことは、学力向上においても効果があったと回答し、理由は生徒の学習に対する意識を変える効果があったからだとしている。

また、「確認シート」は、継続して活用することでさらに効果が現れることも指摘している。

【表3】授業担当者の意識

授業実践後の授業担当者に対するアンケート結果(2名)		
質問の観点	回答	回答理由
学習指導改善への効果	大いにある	目に見える形で、生徒の目標実現状況を知ることができたことは、有意義な情報だった。学習目標の設定作業自体が、教材研究の方向性を明確にしてくれる効果があった。
	どちらかと言えばある	多くの生徒が「C」評価を付けた苦手分野について授業中に重点的に指導したり、個別に指導することが可能になった。評価シートの1回目の部分は特に役立った。2回目は指導者側の確認に利用したが、このシートを継続的に活用すれば、2回目の評価を次の単元で生かしていくことができる。
学力向上への効果	どちらかと言えばある	ねらいを目に見える形にしたため、意識変革がなされ、意欲的に取り組む契機になった。
	どちらかと言えばある	生徒の意識、不得意分野を確認しながら授業を進めることができるので効果はある。

(3) 国語科における評価の工夫による研究のまとめ

学習指導の改善が、意図的に評価を進めることで実現されることが実証された。今後、年間指導計画に基づいた「学習のねらい確認シート」をさらに作成しやすく、活用しやすいものとし、継続的な活用が可能となるように工夫していきたい。

6 数学科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察

(1) 数学科における評価の工夫による指導改善の計画

ア 指導の工夫・改善の視点

高等学校では、一方的な解説や説明が中心の授業が行われていると言われることがある。数学の授業でも基礎的事項の説明の後、例題の解説、問いによる確認、演習問題による練習という繰り返しで授業が進められることが多い。しかし、このような授業で、生徒が数学への興味や関心をもつことは期待しにくい。授業改善の方策として、特に関心・意欲・態度、数学的な見方や考え方を評価できる観点として常に取り上げ、工夫することが大切である。そのため、授業においてそれらを実践できる数学的な活動場面を用意する必要がある。

また、生徒の学習状況を日々の教育活動の中で把握する方法として、観察による評価は重要である。関心・意欲・態度の評価において、観察による評価の比重は他の観点より大きく、ワークシートやペーパーテスト、レポートなどで評価を行う場合にも、日々の観察が基になって、授業における生徒のつまずきの原因を把握することができる。

イ 年間指導計画 に基づいての授業構想

そこで数学科では、【図10】の年間指導計画に基づき、1単位時間ごとの評価等にかかわる指導計画を立てて実施し、反省して次の授業に生かしていくこととした。(年間指導計画の詳細は補充資料参照)

ウ 指導計画・評価シートについて



指導計画・評価結果をまとめるために、次の(ア)～(オ)の内容を盛り込んだシートを作成した。【図11】は単位時間ごとの指導計画・評価実施結果を表す指導計画・評価シートの一部である。(詳細は補充資料参照)

- (ア) 科目、担当学年、クラス等
 - (イ) 当該時間の指導内容等
 - (ウ) 評価する観点、1単位時間の授業における評価規準、評価方法
 - (エ) 評価の結果
 - (オ) 本時の反省と次時の指導改善のポイント
- (ア)については、複数の科目やクラスを担当する場合も想定されるので記載する欄を設けることとした。

(イ)については、ポイントをおさえて、簡略にできる内容は簡略化して継続的に指導計画・評価計画が考えられるように配慮した。

(ウ)については、(イ)の指導内容を受けてどこに焦点を当てた評価をするのか、重点的

平成17年度 当手県立高古高等学校 年間指導計画 (科目 数学)

指導学年	単位数	内容のまとめ(単元)	使用教科書	
1	4	三角比	数研出版【新編数学】	
小単元	配当時間	1 単位時間の授業における評価規準		
三角比	2	(ア)関心・意欲・態度 (イ)数学的な見方や考え方 (ウ)表現・処理 (エ)知識・理解	(ア)具体的に相似な直角三角形を用いて、そこから辺の長さの比が一定であることを考えることができる。 (イ)三角比の表を用い2辺が与えられた直角三角形の1つの角を求めることができる。 (ウ)具体的な例をとおして、問題の意味をよく理解し、適切に処理することができる。	(ア)   どんな直角三角形に対しても三角比を求めることができる。 (直角の位置が右下でない時も理解できる)

【図10】 年間指導計画 (数学)

指導する内容のまとめ(単元)	図形と計量									
本時の指導範囲(47時間中)	3時間目)三角比									
本時の指導目標	文章問題を解くことにより、三角比が普段の身の回りの生活に活用できることを理解させる。									
教科書の範囲	P102 ~ P103									
副教材(問題集)の使用部分										
本時間は使用しない										
特に評価する観点とその評価規準	<table border="1"> <thead> <tr> <th>観点</th> <th>関心・意欲・態度</th> <th>表現・処理</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>おおむね満足できる状況</td> <td>(ア)中学で学習した直角三角形の比を思い出し、具体的な問題に意欲的に取り組みようとする。</td> <td>(イ)具体的な例を、図をかく事により適切に処理できる。 「鉄塔の先端の真下から20mはなれた地点から塔の先端を見上げると水平面とのなす角が40°のとき塔の高さを求めよ。」</td> </tr> </tbody> </table>	観点	関心・意欲・態度	表現・処理	おおむね満足できる状況	(ア)中学で学習した直角三角形の比を思い出し、具体的な問題に意欲的に取り組みようとする。	(イ)具体的な例を、図をかく事により適切に処理できる。 「鉄塔の先端の真下から20mはなれた地点から塔の先端を見上げると水平面とのなす角が40°のとき塔の高さを求めよ。」			
観点	関心・意欲・態度	表現・処理								
おおむね満足できる状況	(ア)中学で学習した直角三角形の比を思い出し、具体的な問題に意欲的に取り組みようとする。	(イ)具体的な例を、図をかく事により適切に処理できる。 「鉄塔の先端の真下から20mはなれた地点から塔の先端を見上げると水平面とのなす角が40°のとき塔の高さを求めよ。」								
評価する方法	関心・意欲・態度...観察法(机間指導等で生徒の様子を観察する) 表現・処理...観察法(演習問題をやらせる)									
評価の結果	<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価結果</th> <th>十分満足できる状況(A)</th> <th>努力を要する状況(C)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>関心・意欲・態度</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>知識・理解</td> <td></td> <td>2,24</td> </tr> </tbody> </table>	評価結果	十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)	関心・意欲・態度			知識・理解		2,24
評価結果	十分満足できる状況(A)	努力を要する状況(C)								
関心・意欲・態度										
知識・理解		2,24								
Cと判断した生徒の原因、事後指導の計画	・まったく図がかけず、進んでいない。個別指導をしたい。 反省及び次時への指導改善のポイント ・ゆっくり説明したつもりだが、全体的に理解度が低かった。もっとヒントを与えながら、具体的な図をかけるようにさせたい。									

【図11】 指導計画・評価シートの一部

に指導する部分はどこであることを明確にすることをねらいとした。関心・意欲・態度についてはどの時間でも観察等でみていくこととし、他の三観点のうち一つの観点到重点をおいた評価計画を作成した。具体的評価規準については、おおむね満足できる状況(B)を記述して、Bよりも優れているものをAとし、BにいたらないものをCとした。

(E)については、(ウ)の記述にしたがって授業時間中に評価できた生徒を記載していく。AとCの生徒のみ記載し、記載のない生徒はBと判断する。(オ)については、Cと判断した生徒について、原因は何であるのか等の気付いた点を記述し、今後の指導に生かしていくこととした。

(2) 数学科の授業実践

実践にあたり、平成17年3月に提示された、学校教育指導指針の高等学校教育質疑応答集(第37集)P48の第3章1、「各学校における評価規準の設定、評価方法の工夫改善」の(1)「各学校における評価規準の設定」で、各校における指導計画に基づいて、単元(題材)の評価規準、単元(題材)の中での「学習活動における具体的評価規準」、具体的な評価方法を示すとある。

これを基に、単元(題材)ごとに「指導と評価の計画」を作成し、評価を後の指導に生かすことが可能になる。本研究では数学の三角比の単元を中心に年間指導計画を作成し、学習活動における具体的評価規準等に応じて、小テスト、観察、ノート提出指導などを工夫する。また、継続的に学習状況を的確に評価するために、「指導計画・評価シート」を作成し、評価が学期末テストなどに偏ることのないよう、評価の時期を工夫し、学習の過程における評価を一層重視する。実践は、県立宮古高等学校1学年六学級中一学級(男子22名、女子20名、計42名)で平成17年6月15日(水)～平成17年9月12日(月)までの52日間行った。1年生の数学担当者は三人で、それぞれ二クラスずつ担当しており、また実践期間内に教育実習十日間、実力テスト二日間、自習二日間、演習五日間、考査対策二日間、考査二日間(80分×2)を含んでいる。

ア 年間指導計画の作成に当たって

1年生を対象にし、担当している三人の教師の授業進度をある程度そろえるなど協力しながら、数学の三角比の単元について、数学の三角関数の単元とのつながりを考慮しつつ年間指導計画(前ページ【図10】)を作成した。

イ 毎時間の指導計画・評価シートについて

毎日の授業にあたり、年間指導計画の評価規準をもとに、生徒の実態にあわせて、評価の観点から二つを盛り込んだ指導計画・評価シートを作成した。授業後に評価規準にそって評価を記入した。Cと判断した場合はその理由を記入し、事後に個別指導内容を記入した。

ウ 実践結果の分析と考察

(ア) 年間指導計画と指導計画・評価シートを活用した授業について

作成にあたって工夫した点は、年間指導計画における評価の四観点のうち、例えば表現・処理において「具体的な例をとおして問題の意味をよく理解し、適切に処理できる」とある。それを受けて、指導計画・評価シートの特に評価する観点とその評価規準を「具体的な例を、図をかく事により適切に処理できる」とし、その学習問題を、「鉄塔の先端の真下から20mはなれた地点から塔の先端を見上げると水平とのなす角が 40° のとき塔の高さを求めよ」とした。前頁【図11】の指導計画・評価シートの努力を要する状況に番、番という生徒の番号が記入された。指導計画・評価シートのCと判断した生徒の原因、事後指導の計画として「まったく図がかけず、進んでいない。厚紙等で作った三角形を移動させ、それを参考にノートに作図させる。」とあるように、事後指導の内容の記述である。AまたCの

評価をまとめたものが【表4】である。

【表4】指導計画・評価シートをまとめたもの一部

月 日	6						8						9																							
	15	15	16	16	23	23	27	27	28	29	29	30	9	10	17	17	18	19	19	22	22	24	24	25	25	31	31	1	1	2	2	5	6	7	8	12
出席番号																																				
氏名																																				

* AとCは2つの観点のうち、1つでもCがあればCとし、2つともAであればAとした。

(1) 授業担当者の意識

「年間指導計画 を作成したことは指導改善に役立ったか」の問いには、「大いに役だった」という回答であった。これは、生徒の実態を考慮した指導内容と評価をとらえ直すよい機会になったためだが、学年担当で授業進度調整なども含め十分協議しながら作成することが望まれる。

「評価シートを作成したことは指導改善に役立ったか」の問いには、「どちらかといえば役立った」という回答であった。ただし、毎時間シートを作成することは困難な場合もあり、年間指導計画 にCと判断した生徒の出席番号を直接書き込むなど、工夫の余地がある。

「年間指導計画 及び評価シートを作成して、授業で活用する方法を今後も継続するか」の問いには、「どちらかといえば継続する」という回答であった。時間的な労力が関係していると思われるが、このような評価シートの記入の改善が考えられる。

「年間指導計画 を作成し、評価シートを活用したことは、学力向上において効果があると思うか」の問いには、「そう思う」という回答であった。Cと判断される生徒を出さないような指導の工夫や、事後指導が有効であったためと考えられる。

(ウ) 授業の進め方に関する生徒の意識

【表5】は、授業の進め方に関する生徒の意識調査の一部であるが、ほとんどの生徒は、授業で考える時間が十分に与えられたり、授業で小テストを行いその場で自己採点をすると、授業が理解し易くなったと感じた。C評価になりがちな生徒の、学習に対する意欲の向上に有効であったためと考えられる。(詳細は補充資料参照)

【表5】意識調査の一部

		(N=41 単位:人)				
項 目		ア	イ	ウ	エ	オ
設問1	あなたは、三角比の授業とき、十分に考える時間が与えられるときがあったと思いますが、このような授業の進め方は学習を理解し易くさせるとおもいますか	21 (51.2%)	18 (43.9%)	2 (4.9%)	0	0
設問2	あなたは、三角比の授業や普段の授業で小テストをおこなったとき、自己採点することがありましたが、そのとき自己採点をしてみて、授業が理解し易くなったと思いますか。	11 (26.8%)	24 (58.5%)	5 (12.2%)	0	1 (2.4%)
ア そう思う イ どちらからといえばそう思う ウ どちらからとえばそう思わない エ 思わない オ その他						

(3) 数学科における評価の工夫による指導改善に関する研究のまとめ

授業担当者の意識や、生徒の授業後の意識調査結果等から総合的に判断して、指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることは、指導改善に役立つと考えられる。

7 地歴・公民科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察

(1) 地歴・公民科における評価の工夫による指導改善の計画

ア 年間指導計画 の作成

地歴・公民科とは、遠い過去や遠隔の地域での事象を知ることですらを相対化し、現在と未来を見つめる基礎教養としての教科であり、国際社会に主体的に生きる資質を養うためにも、適切な指導と評価を行うことが重要である。

従来はテストの得点と教務手帳等のメモを中心とした「評価」が行われる傾向にあったが、生徒の動きを的確に観察してさらに先へと進むように支援することが現在求められている指導と評価だと言える。

最近の生徒には、読書量が少なく、目に見えないものについての想像力が弱い、好きなことしかやろうとしない、言葉や資料を読み取る力が弱い、作業的学習はできるが、新たに生み出すことが不得意である、等の特徴が見られる。しかし、想像できなければ視聴覚に訴える、好きなことしかやらないのなら好きになるように工夫する、資料の読み取りが不得手ならばきちんと輪読する、創造ができないのならばせめて精巧な模写をできるようにする等、発想を転換して生徒に生きる力をつけさせるべきである。その際には、関心・意欲・態度を高める資料を探す、思考・判断する習慣をつける、資料活用に慣れさせる、知識を増やし理解を深める、という順序で指導を工夫すれば指導計画が組み立てやすいと考えられる。指導力のある教員は暗黙知で観点別評価をバランスよく実践するが、評価がうまくいっていない場合はどれかに偏っていたり、どれかが欠けていたりする傾向がある。自分の指導内容を点検するという意味でも年間指導計画（【図12】はその一部、詳細は補充資料参照）や評価シートを作成する意義は大きく、生徒と評価シートをやりとりすることで信頼関係が構築されていき、生徒自身が自分の向上を目で確認するという点で教育効果は大なるものがあると言える。

指導学年	単位数	内容のまとめり（単元）			
2 学年	4	（例）第4章 中世社会の成立			
小単元	配当時間	1 単位時間の授業における評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
第9章の 3 武士の 社会 導入 展開 まとめ	2 (その1)	<p>事前学習プリントに、関心をもって取り組もうとしている。執権政治の確立の過程に関心を持ち、積極的に当時の時代感に近づこうとしている。</p> <p>御家人達の土地への強い思いに対して関心を高め、意欲的に追究しようとしている。</p> <p>北条政子の切迫した思いと、武士たちの動揺する心情に対して関心を高め、意欲的に追究しようとしている。</p>	<p>「一生懸命」は元々「一所懸命」と書かれていたことから、武士たちにとって土地のもつ意味の重要性を考えている。</p> <p>御家人たちの将軍専政への不信感が、御家人たちの合議制へとつながったことを考えている。</p> <p>北条政子が涙の演説をしなければならぬほど、幕府の状況が緊迫していることを考えている。</p>	<p>自己評価表や事前学習プリントに回答し、レーダーチャートを作成している。</p> <p>北条政子の演説を現代語に訳して、調べた過程や結果をわかりやすく、適切に表現している。</p>	<p>事前学習プリントの基礎的な学習内容を理解できる。</p> <p>北条氏が執権として幕府の実権を握っていく過程を理解できる。</p> <p>承久の乱が幕府の存亡を賭けた戦いであったことを理解できる。</p>

【図12】年間指導計画 の例

イ 評価シートの作成と活用

(ア) 評価シートの作成

高等学校の地歴・公民科の授業において、評価の観点を明確に分類した三種の評価シートの作成方法について次頁 ~ に示す。

授業者用評価シートの作成（【図13】はその一部、詳細は補充資料参照）

- ・年間指導計画 を基に、授業で伝えたい内容や培いたい生徒の能力をリストアップし、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」、「知識・理解」に分類する。
- 生徒用自己評価シートの作成（【図14】はその一部、詳細は補充資料参照）
- ・授業者用の評価シートに基づき、生徒が考えやすく答えやすい質問を作成する。
- ・日々の生活に即した、具体的な内容になるように留意する。
- 生徒用自己分析シートの作成（次頁【図15】はその一部、詳細は補充資料参照）
- ・自己評価シートを踏まえて、学習によって自らの力になったことが実感されるように質問を作成する。

(1) 評価シートの活用

評価の観点から明確に分類した三種の評価シートの活用方法について ～ に示す。

授業者用評価シートを基に指導案を作成し、各領域別にむらのない授業を展開できるように準備する。授業実施前に生徒用自己評価シートを配布し、記入させ、回収する。

- ・ただ配布して記入するより、一つずつ質問して、生徒の反応を見ながら補足説明を加えると効果的であり、授業への関心を高めることもできる。
- ・余白に様々なコメントを記入させると実態がよくわかるので、十分に時間をとって書かせる。点検して生徒の実態を把握し、留意すべきことを授業者用評価シートに記入する。

（授業）

授業後に生徒用分析シートを配布し記入させる。学習の全体状況が視覚的にわかるレーダーチャートにも記入させる。（次頁【図16】はその一部、詳細は補充資料参照）

- ・よくわかったところもそうでないところも率直に記入できるように配慮する。
- ・復習が必要な点なども書かせるとよい。
- 生徒用自己評価シートを返却し、事前と事後の変容を実感させる。
- ・レーダーチャートを効果的に活用する。（観点別評価の変化を視覚的に確認）

生徒用自己分析シートを回収、点検して生徒の反応を確認し、次の指導に役立てる。

次の授業の資料を作成する。 に戻る。

2年組 氏名		氏名	備考
	【関心・意欲・態度】質問文		
1	武士に対する関心		
2	鎌倉時代の政治に関する興味		
3	生活史・精神生活		
4	中世と地域との関わり		
【思考・判断】			
5	中世からの影響（四字熟語）		
6	資料の読解（北条政子の演説）		
7	現代との共通点（専制政治の崩壊等）		
8	地頭の勢力拡大に対する荘園領主の対抗策（下地中等）		
【資料活用の技能・表現】			
9	人物への共感（北条政子の演説）		
10	系図史料からの読み取り（頼朝の系図）		

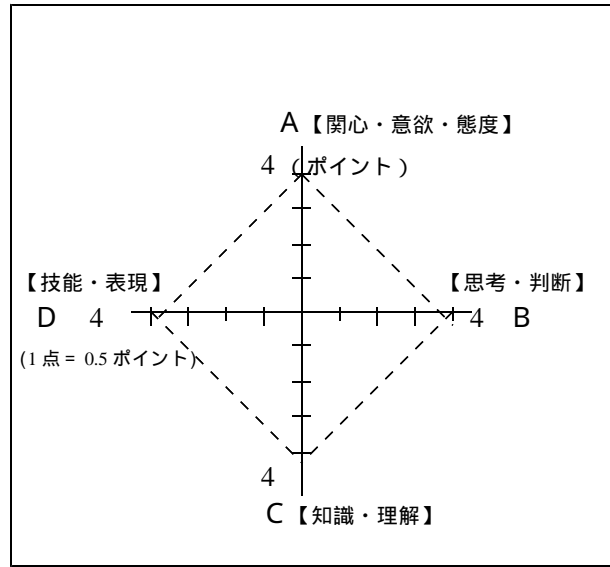
【図13】授業者用評価シートの例

2年組 氏名		氏名	備考
	質問文		
1	貴族より武士が好きだ。	はい	いいえ
2	北条氏が幕府の実権を握る経緯を知りたい。	はい	いいえ
3	鎌倉時代の武士の生活ぶりを知りたい。	はい	いいえ
4	中世の地名の名残を知っている。	はい	いいえ
【関心・意欲・態度】合計A			
5	「一生懸命」はもともとなんと書かれていたかを知っている。	はい	いいえ
6	北条政子の演説から、当時の幕府の状況を考えることができる。	はい	いいえ
7	若い為政者が年上の家来達を上手くコントロールできる術を知っている。	はい	いいえ
8	地頭の力が拡大すると困るのは誰かを知っている。	はい	いいえ
【思考・判断】合計B			
9	北条政子の演説を現代語訳できる。	はい	いいえ
10	撰家将軍と頼朝のつながりを系図から読み取れる。	はい	いいえ

【図14】生徒用自己評価シートの例

2年組 氏名			
質問文			
1	貴族よりも武士が好きになった。	はい	いいえ
2	北条氏が幕府の実権を握る経緯がわかった。	はい	いいえ
3	鎌倉時代の武士の生活ぶりがわかった。	はい	いいえ
4	中世の地名の名残を身近な所でも探してみよう。	はい	いいえ
【関心・意欲・態度】 合計A			
5	「一生懸命」から武士の土地に対する思いについて考えることができた。	はい	いいえ
6	北条政子の演説から当時の幕府の状況を考えることができた。	はい	いいえ
7	2代将軍頼家は年長の家来達を尊重し、幕府を運営するべきだと気がついた。	はい	いいえ
8	地元の力が拡大すると困るの指助がわかった。	はい	いいえ
【思考・判断】 合計B			

【図15】生徒用自己分析シートの例



(2) 地歴・公民科の授業実践

ア 実践校・学年

盛岡北高等学校 2学年文系日本史選択者(男子34名、女子45名、計79名)

イ 実践の概要

評価シートを活用した実践の概要を【表6】に示す。

【表6】実践の概要

項目	内容
1 事前アンケートの実施(10分)	・該当分野について、中学校レベルの内容を確認する小テスト形式のアンケートを実施した。
2 授業者用評価シートの作成	・年間指導計画を参考に、授業で学ばせたい内容や培いたい能力をあげ、観点別に分類した。 ・1のアンケートをもとにして、理解している点としていない点を事前に把握しながら、質問を作成した。 ・配当時間2時間分の内容で作成した。負担軽減のために「知識・理解」のみ8項目、その他の観点は4項目に絞った。分野ごとでそれぞれの観点が増減することも考えられる。
3 生徒自己評価シートの作成	・授業者用評価シートをもとに、生徒が答えやすいように質問を作成した。 ・わかりやすく、具体的な質問になるように工夫した。 ・学習の全体的状況が視覚的にわかるように、観点別評価を踏まえたレーダーチャートを作成した。
4 生徒自己分析シートの作成	・生徒自己評価シートを踏まえ、学習後に理解が深まったことが実感されるような質問を作成した。
5 指導案の作成	・授業者用評価シート、事前アンケートをもとに指導案を作成し、観点別評価を組み込んだ。
6 授業前の生徒自己評価シートの配布、記入、回収。(30分)	・質問内容を確認し、補足の説明をしながら実施した。
7 授業プリントの配布と予習の指示	・指導案や自己評価シートにのっとり、ポイントを絞った授業プリントを配布し、予習させた。
8 回収した生徒自己評価シートの点検と実態把握。	・大まかな特徴を分析し、生徒の実態を把握し、授業者用評価シートにまとめた。
9 授業の実施(9~13まで30分)	・授業プリントを使いながらすすめ、授業後に回収し、取り組みを評価の一部にした。
10 授業後の生徒自己分析シートの配布、記入	・理解できたところや復習が必要なところを必ず論述させた。 ・質問内容を再度確認し、補足の説明をしながら実施した。
11 生徒自己評価シートの返却	・授業前に書かせた自己評価シートと自己分析シートを比較させて、どの観点がどのように変化したのかを確認させた。とくに、レーダーチャートでの変化に視覚で注目させた。
12 授業後アンケートの配布	・記名ではあるが、これによる評価はしない点を強調し自由に書けるように配慮した。
13 自己分析シート、自己評価シート、授業後アンケートの回収	・授業終了後すべてを回収した。
14 点検	・反省点や課題を検討し次の授業に役立てた。

ウ 実践結果の分析と考察

評価シートを活用した授業による四つの評価の観点における回答率の変化を【図17】に示した。

< 授業前 >		< 授業後 >		
評価の観点	生徒自己評価シートからの回答率	生徒自己分析シートから、回答率が		
		下がった	変わらず	上がった
関心・意欲・態度	55.7%	10.0%	28.6%	61.4%
思考・判断	36.7%	4.3%	18.6%	77.1%
技能・表現	53.7%	35.7%	30.0%	34.3%
知識・理解	34.8%	0.0%	7.1%	92.9%

回答率は「はい」の数の割合を示す

【図17】回答率の変化（四つの評価の観点）

(ア) 授業前の生徒実態把握

～ は生徒自己評価シート、事前アンケート等を点検し、大まかな特徴を分析しまとめたものである。

「関心・意欲」は概ね高い。

技能や表現力には自信をもっているようだ。

事前の自己評価シートやアンケートからも、中学時代に習った学習内容をかなり忘れていた。

そのため、「思考・判断力」、「知識・理解」が低くなったのではないか。

(イ) 授業後の変化

、 は自己評価シートと自己分析シートを比較し、どの観点がどのように変化したかをまとめたものである。

事前の自己評価シートと事後の自己分析シートを比較してみると、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「知識・理解」の三観点に関する回答率が上昇した。特に「思考・判断」と「知識・理解」は回答率が上がった生徒の割合が大きく伸びている。これは、学習範囲と評価規準を明確に提示したことや、自己も他者も存在を確認できる場を設定したことなどによって、内容の理解が深まった事をあらわしている。

「資料活用の技能・表現」は回答率が上がった生徒と下がった生徒がほぼ同じであった。「北条氏の系図を書かせる」は18%、「武士の生活の特徴を絵巻から読み取る」は55%など、回答率がやや低めだった一方で、「北条政子になりきり演説する」は回答率67%と高く、生徒の取り組みも良かった。補足説明が不十分であったり、さらに吟味すべき質問内容もあった。

(ウ) 授業後アンケートの集計と分析・考察

生徒による評価シートを活用した授業後アンケートの集計を【表7】に示した。また、質問項目及び記述欄それぞれにおいて分析・考察したものを次頁、に示した。

【表7】授業後アンケートの集計

質問項目	割合 (%)
	【()内はそのうちで強く当てはまると答えた割合】
1 とてもおもしろかった。	86.8% (7.9%)
2 まったくつまらなかった。	5.3% (0.0%)
3 自分なりにがんばった。	80.3% (19.7%)
4 どちらかといえばさぼってしまった。	17.1% (1.3%)
5 十分に満足できる内容だった。	60.5% (9.2%)
6 満足できる内容ではなかった。	25.0% (1.3%)
7 またやってみたい。	78.9% (14.5%)
8 こんな学習はこりこりだ。	10.5% (2.6%)
9 次の課題でも何とかやれそうだ。	80.3% (9.2%)
10 次の課題でも失敗しそうだ。	11.8% (0.0%)
11 自分の考えや意見を友人にもわかってほしい	39.5% (2.6%)
12 自分の考えや意見は友人に知られたくない。	30.3% (1.3%)

授業後アンケートの質問項目の分析・考察

今回の授業については「おもしろかった」という意見が9割近くにのぼった。また、「がんばった」や「満足できた」という意見も多く、さらに「またやりたい」や「次もやれそうだ」という意見も8割あり、生徒が自らの努力の成果を実感することで、次の授業への期待感、意欲、自信などを高めることができることを確かめられた。また「自分の考えを他人にもわかって欲しい」という意見も4割ほどあり、生徒に発表の場を与える方策が今後に求められる。

授業後アンケートの記述欄の分析・考察

授業後アンケートの記述欄について分析・考察したものを【表8】に示す。

【表8】記述欄の分析・考察

記述内容	分析・考察
・授業前の自己評価シートによって、これから学ぶ内容を大まかにつかむことができ、授業の理解が進んだり、意欲が湧いたので良かった。(7人)	・何を学ぶのかを事前に生徒に示すこと、つまり何が評価されるのかを示すことが、生徒の意欲にもつながると示している。これが今回の評価を組み込んだ授業の主眼でもあり、年間指導計画の提示にもつながっていくことである。とかく復習中心と思われがちな授業を、評価を組み込んだ自己評価シートなどで事前に意識させると定着も良く、生徒自身の満足度も上がることが今回の授業で実証された。
・自己評価シートと自己分析シートのレーダーチャートによる比較が、視覚的にとてもわかりやすかった。(5人)	・レーダーチャートの面積の拡大によって、自らの学習が深まったことが実感でき、自信がつき、やる気が生まれたといえる。また、チャートの形の変化が何故生じたのかを自ら分析したり、学習不足だった点を復習しようとするなど、予想外の効果もあった。
・発表のあたりの事が印象深く残り、良く覚えることができた。(3人)	・評価シートに基づいた学習プリントを作成し、事前に予習させながら授業を進めたことが良かった。発表をするには、その背景となる歴史的事象や資料の勉強が欠かせず、生徒が自ら学ばねばならない。この自ら学ぶということが本当の学びの定着に重要な要素になっているので、長期的に見通した年間指導計画を作成し、問題解決型の学習を組み込んでいくべきであろう。
・興味のなかった武士の時代への興味が湧いて意欲的に取り組むことができた。(3人)	・女子の意見である。知らないことが無関心を生んでいたことの典型的な例と言える。そのためにも、自己評価シート等でよりわかりやすく、興味・関心をもたせる工夫がすべての始まりだと言える。
・評価シートにもとづいた授業で、調べる活動が大変だった。(5人)	・成績の悪くない、むしろ上位の生徒に多い意見だった。単に授業やテストを受けるのではなく、自ら学ぶことが学ぶことの本質であること、受け身になることが当たり前だという先入観を捨てさせる努力が必要であると感じた。

(3) 地歴・公民科における評価の工夫による指導改善に関する研究のまとめ

観点を明確に分類した評価シートの作成と活用による指導と評価の工夫は、指導改善に効果的であることが明らかになった。学習範囲と評価規準の明確な提示、生徒の声の集約、具体的で回答しやすい設問の工夫、視覚に訴えるチャートの作成と活用、自己も他者も存在を確認できる場の設定、そして何より自らの学力が向上したという達成感の獲得が次の学習に結びついていくことが期待される。

8 外国語科における評価の工夫による指導改善の計画と授業実践及びその分析と考察

(1) 外国語科における評価の工夫による指導改善の計画

ア 年間指導計画 の作成

昨年度の研究において示した方向性に基づき、年間指導計画（教科の目標及び評価の計画）、年間指導計画（科目の目標及び評価の計画）を基に、各単元の内容及び評価の計画をまとめた年間指導計画を作成する。計画には、配当時間、題材及び言語材料、そして1単位時間の授業における評価規準を明示する。【表9】はその一部である。（詳細は補充資料参照）

【表9】年間指導計画 の例

学年	単位数	使用教科書：	1 単位時間の授業における評価規準			
2	4	使用副教材：	1 単位時間の授業における評価規準		1 単位時間の授業における評価規準	
単元名	配当時間	題材及び言語材料	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
Lesson 1 A Volunteer in Mali	8	<ul style="list-style-type: none"> 日本の NGO に参加した村上氏のマリ共和国での活動の紹介 S+V(be動詞) + C(=分詞) S+V+O+C(=過去分詞) 相手に勧める表現 	<ul style="list-style-type: none"> 英文を読んで、ボランティア活動について理解し、意見や感想を述べる。 相手に勧める表現を用いて話そうとする。 SVC/SVCOC の形を用いて新しい英文を書こうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 難読語を正しく発音する。decision / neighbor / bulletin / encourage / rarely 等 SVC/SVCOC の形を用いて正しい英文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 対話のイントネーション等を聞き分ける 英文の概要を読みとり要約する。 	<ul style="list-style-type: none"> [f][h]の違いを聞き分ける。 子音と子音の連音を発音できる。 SVC/SVCOC の形を正しく理解できる。 ボランティア活動に対する意識の違いを理解する。

イ 単元の評価シートの作成

年間指導計画に基づいて、各単元ごとの評価シートを作成する。評価シートには単元の目標に沿った評価規準を記載し（【表10】）、生徒の自己評価を中心とした記述とし、目標の実現状況の把握を主目的とする。達成度が低い項目、あるいは個人に対しては、全体あるいは個別の指導計画を立てるための資料として活用する。

また、各単元に共通のものとして、国立教育政策研究所による評価規準を参考にして、内容のまとめりごとに観点別の評価規準を設定し（【表11】）、生徒の自己評価及び必要に応じて相互評価を取り入れた評価活動を行う。授業担当者は生徒の活動を個々に観察し、数値評価とコメントにより適切なフィードバックを行うこととする。これにより、英語活動全体に関わる活動の振り返りができ、次の学習に向けて新たな目標の設定が可能となる。さらに、授業の中で理解が十分ではなかった内容及び授業全般に対する要望等を記入する欄を設け、事後指導や指導内容・指導方法の改善に生かすこととした。（各表とも、詳細は補充資料参照）

【表10】単元における評価規準の例

	この単元で達成すべきこと	達成度	達成できなかった部分・項目・内容
1	本文の内容を理解し自分の意見を持つ	3 2 1	
2	新出語句の発音・意味を覚える	3 2 1	
3	SVC/SVCOC を理解し正しく使う	3 2 1	
4	相手に勧める表現を理解し正しく使う	3 2 1	
5	本文を正しくスムーズに音読する	3 2 1	

【表11】全単元における共通評価規準

	評価項目	自己評価	相互評価	教科担任による評価とコメント
聞 く こ と	・聞いた内容の要点を理解する	3 2 1	3 2 1	3 2 1
	・関心をもって相手を見て話を聞く	3 2 1	3 2 1	
	・理解できない部分も推測して聞く	3 2 1	3 2 1	
	[評価の平均]			

ウ 「英語力の目標（改訂版）」の活用

四領域におけるレベル別の自己判定による実力診断資料である「英語力の目標」を、昨年度の研究協力校での実践を基に改定し、同程度の難易レベルのものを五種類作成した。これは、同一学年（年度）での複数回使用、そして三年間での使用を想定したものである。その活用により、自分の英語力のある程度測定した上で、目標を立て、日々の授業に取り組むことができる。（詳細は補充資料参照）

(2) 外国語科の授業実践

ア 英語力の判定

「英語力の目標」を用いた英語力の判定を、授業担当者の指示のもとに実施した。第一回は第一期考査後の7月上旬、第二回は第三期考査後の12月上旬に実施した。「英語力の目標」に見る英語力の変容の分析及び生徒個々の目標設定の状況等の分析については別途行う。

イ 単元ごとの評価シートの活用

各単元の学習終了後、授業の時間を利用し、生徒の自己評価を中心として、目標の達成状況や授業に対する要望等の記述をさせた。全体的に達成状況の思わしくない項目については、授業中に再説明を行ったり、補充プリントで演習を繰り返したりした。また、個別には授業時間外（放課後等）の事後指導の計画を立てたり、学習相談の機会を設けたりした。

ウ 実践結果の分析と考察

(ア) 評価シートの活用にかかわる分析と考察

生徒による自己評価が中心であり、自己に対する要求度の高低の差やそれぞれの達成基準の違い等もあるが、全体としての理解度や目標達成度の把握には有効であった。評価結果を基にして、全体の理解度がやや低いと判断される項目については、一斉授業の中で説明や演習を補足し、個々の理解度が思わしくないと判断される事項については、個人または少人数を対象にした事後指導を計画する際の参考になった。

授業中にはなかなか質問しづらいことでも、個々に記述する形をとることにより、生徒一人一人がどこでつまづいたのか、どの部分を補強すれば次の学習につながるのか、あるいは関心や意欲を失いかけているような状況をも把握することができ、全体指導と個別指導を有機的に組み合わせて指導することにより、指導改善及び学力向上を図るための材料となった。

また、単元の評価シートの中に、生徒による、授業への要望等の自由記述欄を設けることで、建設的な意見に対しては一斉授業の中で、あるいは個別に対応することで指導改善につなげることができた。全体にかかわるような意見や要望については、授業中に説明し、可能なものについては改善に努めた。授業や学習内容にかかわる記述がほとんどであったが、中には該当の授業以外のことや、個人的なこと等を伝えてくる生徒もあり、適切な対応を取ることにより、相互の信頼関係の構築の一助ともなった。

意見・要望の中で、前向きで建設的な内容であり、改善に取り組んだものは、板書の仕方（字の大きさ、色の使い分け、黒板の使い方）、指名の仕方（偏りのない指名、明確な指名）、説明の仕方（用語の説明、例文を用いた説明、補助プリントの活用）、宿題の出し方（量の調整、他教科との調整）等である。

(イ) 学力向上にかかわる分析と考察

単元ごとの評価活動（形成的評価）とそのフィードバックによる学力の伸びを、各種試験結果の指数により検証する。実践対象が学年の一部の学級であったので、形成的評価を実施

した学級と実施しなかった学級について、校内定期考査（出題範囲が指定された試験）と全国模擬試験（出題範囲が指定されていない試験）の結果を平均点の指数で比較した。【表12】は定期考査の結果を表したものであり、学年全体の平均点を100とした場合の、それぞれの学級（群）の指数を示したものである。考査の実施時期は、第一期が評価活動実施前（6月）、第二期が実施直後（9月）、そして第三期が実施4ヶ月後（11月）である。【表13】は、全国模擬試験における結果を同様に示したものである。

【表12】定期考査における指数

対象群	6月	9月	11月
形成的評価の実施群	96	97	98
形成的評価未実施群	102	101	101

【表13】全国模擬試験における指数

対象群	7月	12月
形成的評価の実施群	94	-
形成的評価未実施群	103	-

数値的にはわずかな差ではあるが、時期を追うごとに向上していることがわかる。生徒及び授業担当者の地道な努力を中心として、評価活動を取り入れた指導改善と生徒の自己教育力の向上の結果と考える。この結果を受けて、形成的評価を全体に取り入れる方向を検討していきたい。

(ウ) 授業担当者の意識

評価シートの活用にかかわって、実践者二名に意識調査の協力を得た。調査紙に記入していただいた記述をまとめたものが【表14】である。

【表14】授業担当者の意識

質問の観点	回答者	回答	回答理由
指導改善への効果の有無	A	ある	生徒からの授業評価により、授業の工夫が図られ、授業への取り組みにも向上が見られた。
	B	どちらかといえばある	自己評価、相互評価により、理解度や要望等をくみ取ることができ、次回からの授業展開を考える上での資料にできる。
学力向上への効果の有無	A	ある	評価する、されることにより自律心が育ち、学習効果が生まれる。
	B	どちらかといえばある	自己評価は自己教育力を育成し、相互評価は授業への主体的参加を促す効果がある。

指導改善の視点については、テストを中心とした通常の評価からはくみ取ることのできない、生徒個々の細部にわたる理解度の把握により、指導改善につながったことがわかる。また、シートに設けた、授業に対する要望等の記述欄が予想以上に活用され、生徒の率直な意見等、生の声を聞くことができ、建設的な提案も見られた。県内でも、生徒による授業評価を取り入れる学校が徐々に増えてはいるが、学期ごと、あるいは年度ごとの実施という形態が多く、改善につなげるにも時間がかかっている場合が多い。その点、評価シートは単元ごとの実施であること、個人あるいは教科レベルで実施されるものであることから、素早く、臨機応変に対応できるという利点がある。

学力向上にかかわる視点については、生徒の自己教育力の育成への言及があり、好ましい主体的な学習へとつなげる材料になったものと考えられる。

(3) 外国語科における評価の工夫による指導改善に関する研究のまとめ

年間指導計画 ～ とそれに基づく単元ごとの評価シートの作成、及び評価シートを活用しての授業実践をとおして、それぞれの手だてが指導改善につながり、生徒の学力向上につながるものであるとの見通しをもつことができた。

学習や授業に対する生徒の関心や意欲の向上、あるいは具体的な学力の伸びについては、意識調査や各種試験等の結果の分析によりさらに検証を行うこととする。

9 指導に生かす評価方法の工夫を図った指導と評価に関する研究のまとめ

これまで、指導に生かす評価方法の工夫を図った推進試案に基づき、指導と評価の計画に従って授業実践を行い、実践結果の分析・考察をとおして、研究の方向性を確認してきた。そこで、今年度明らかになったことについて、成果と課題をまとめる。

(1) 成果

ア それぞれの教科の内容や授業構成等の特性に応じて、指導改善に生かし、生徒の学力向上に役立てるための、年間指導計画 ~ 及び評価シートを提示することができた。

イ 生徒の学習状況を観点別に評価することにより、学習の目標をもたせ、学習意欲の喚起を図ることができた。

ウ 形成的評価と評価結果のフィードバックにより、目標をより明確にした学習指導の方向性についての見通しをもつことができた。

(2) 課題

ア 生徒の学力をより客観的にとらえ、適切な評価につなげるために、評価シートの様式をさらに吟味・工夫する。

イ 生徒の意欲をさらに高め、指導改善と一体化した、より効率的な評価方法の在り方をさらに検討する。

以上のことから、課題は残るものの、高等学校における年間計画 と評価シートを活用した学習指導は、指導改善による生徒の意欲の喚起、そして学力向上につながるという見通しをもつことができた。

高等学校の学習指導改善の研究のまとめ

1 研究の成果

この研究は、指導に生かす評価を工夫し、学習指導の過程における評価を意図的に進めることにより、高等学校の学習指導の在り方を明らかにし、指導の改善に役立てようとするものである。そのために、3年次に当たる今年度は、国語、数学、地歴・公民、外国語の四教科において、推進試案に基づく授業実践を行い、授業実践の分析と考察をとおして、年間指導計画 及びそれを基にした評価シートの有効な活用方法についての見通しをもつことができた。なお、成果として得られたのは次のことである。

(1) 指導に生かす評価の工夫

高等学校における、指導に生かす評価を取り入れるための推進試案を作成し、年間指導計画 ~ 及び評価シートを活用することによって、指導改善の方向性についての見通しをもつことができた。

(2) 推進試案に基づく授業実践と実践結果の分析と考察

推進試案に基づいた授業実践により、意図的な評価を位置付けた指導と評価の計画が、生徒の学習意欲を喚起するとともに、学力向上につながるという見通しをもつことができた。

(3) 指導に生かす評価の工夫を図った指導と評価に関するまとめ

各教科における授業実践の分析と考察及び研究のまとめから、年間指導計画 及び評価シートの工夫を図った指導と評価の計画の妥当性について見通しをもつことができた。

2 今後の課題

本研究では、高等学校の学習指導の改善に関し、指導に生かす評価の在り方について明らかに

してきた。今後は、より多くの実践や検証により、評価を通しての学習指導改善、そして、生徒のさらなる学力向上を図るためのより具体的な指導方法を提案していきたい。

<おわりに>

この研究を進めるにあたり、ご協力いただきました研究協力校の先生方、生徒のみなさんに心からお礼を申し上げます。また、研究協力員としてご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 梶田叡一（2004）,『絶対評価 目標準拠評価 とは何か』,小学館
梶田叡一（1983）,『教育評価』,有斐閣双書
金谷 憲（2003）,『英語教育評価論』,河源社
北尾倫彦・祇園全祿編(2002),『観点別学習状況の新評価基準表』,図書文化社
今野喜清他編（2003）,『学校教育辞典』,教育出版
静岡県教育委員会高校教育課(2001),『魅力ある授業づくり』
渋谷憲一（2003）,『教育評価の基礎』,教育出版
根本 博（2004）,『数学教育の挑戦』,東洋館出版社

【参考Webページ】

- 国立教育政策研究所 <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kou-sankousiryou/html/index.htm>
岐阜県総合教育センター <http://www.gifu-net.ed.jp/gec/>